

2013年度 人間科学部会学術講演会 和久洋三 先生「子どもの目が輝くとき—創造力は生きる力—」

Yozo Waku's Commemorative Speech for the Foundation of the Society of Human Sciences
“When children's eyes shine — Creativity leads to power for living”

福井逸子 抄録
Summarized by Itsuko FUKUI

〈講演者近影〉



〈講演会風景〉



日時：平成25年10月28日(月) 15:00～16:30

会場：金沢星稜大学 A11講義室

和久 洋三 (わく ようぞう) 先生のプロフィール

1966年、東京大学美術学部工芸科工業デザイン専攻卒業、
1968年、同大学院修了、以後フレーベル館を経て、保育所で2年間の保父体験をする。

1972年からは、日本全国の有名百貨店にて、数十回の個展や催事展を開催する。

1982年、「国際フォルム展」入賞、ドイツで「優良玩具選定」を受ける。同年から1年6か月間、スペインのセビリア郊外にて童具の制作、研究活動に専念する。

1989年、東京大田区に『童具館』を設立。「わくわく創造アトリエ」を開設し、子どもの創造活動に取り組む。

1995年、文部省(当時)「幼稚園の園具・教具の整備等に関する調査研究居力者」委員に選ばれる。また、同年より2年間、NHK教育テレビ「すくすく赤ちゃん」に出演、2006年、NHK教育テレビ「すくすく子育て」に出演。

2007年、神戸ビエンナーレ「和久洋三童具展・積み木で遊ぼう」出展。

2012年、日本乳幼児教育学会にゲスト講演者として参加
2013年、神戸ビエンナーレ・創造玩具コンペティション審査委員。

現在は、童具館館長、和久洋三わくわく創造アトリエ主宰、童具開発研究WAKU所長、東北芸術工科大学大学院客員教授

本日、この会場には、学生さんが沢山いらっしゃるようなので、今日は、学生さんに向けてお話させていただきます。私は、今までに、いろいろな工芸のデザインをしました。実は、大学卒業後に、ある電気メーカの人が私を訪ねてきて、扇風機のデザインをして欲しいといわれました。しかし、当時の私は、3年間程で壊れるものをつくることに疑問を持っていました。工芸デザインは、消費者がひとつ気に入ると何万個も売れる、こんな良い仕事はないと選んだのですが、3年間で壊れるものをつくる事に限界を感じていたのです。その後、私は、フレーベル館(現在、子ども向けの遊具や絵本を販売している会社)に就職しましたが、その会社からは、学校や施設に行き、おもちゃを作れという課題を与えられました。私は、この頃、子ども達と共に、おもちゃを作ることに使命を感じていました。

人間は、何のために生まれ、何のために生きているのかを考えたことはありますか？私は、学生時代、「ライフワークに出会いたい」という強い思いを持っていました。これを自分のライフワークにするぞという強い思いがあれば、何でも頑張れます。私は、大学卒業後、研究者、保育者、作り手達が、一丸となって、仕事に取り組んでいる、いわば理想とする会社である「フレーベル館」に面接が通りました。しかし、この時、思い通りになることが怖いと

いうことも感じました。

当時の私は、おもちゃのデザイナーを目指していましたが、直接子どもに関わりたいという思いも強く、予備校時代（美術の予備校）の教え子からの紹介で、2年間、保育所でアルバイトをすることにしました。当時は、保育士を保父と呼んでいた時代ですが、思わぬやすいお給料に唖然となったものです。しかし、保育所に通ったお蔭で、子どもに学ぶという謙虚な気持ちに立ち返ることもできました。「ものを作ること」に繋がることを、保育所で調査することもできました。「子どもは、何で遊ぶのが一番多いのか」この答えは、「ボール」と「積み木」だったのです。これは、丸と四角の世界の中では、子ども達が夢中になることができるという結果ですが、この答えがでるのには、その後、20年間かかりました。

しかし、男性保育士（保父）は、よくもてました。当時、門に入ると子ども達を投げ飛ばすのが日課でした。時には、強い力で投げ飛ばすこともありました。今でも忘れることができないこんなお話があります。

名前は、みいちゃん。みいちゃんは、私の顔を見ると、いつも真っ先に飛びついてくる、とても元気な女の子でした。そんな、みいちゃんが、ある日園庭の片隅にぼつんとうつむいて立っていました。近づいで目線をだどっていくと、新品の赤い運動靴が目に入りました。私は、みいちゃんに、「いいねえ。とっても似合うよ」と声をかけました。すると、彼女はうれしそうに、こう言いました。「この靴は、お父ちゃんに買ってもらったの。でも、お父ちゃんは死んじゃったの。」赤い靴は、生前お父さんに買ってもらったもので、まだ大きくてはけなかったものが、やっとはけるようになったのでしょうか。今まで、靴をばーんと放って保育室に入っていくような元気なみいちゃんでしたが、それ以来、きちんと赤い靴を揃えて入るようになりました。きっと、その靴に、お父さんのわが子への思いが宿ったのでしょう。一般的に赤い靴は、誰にもらおうが、どうもらおうが、同じ赤い靴です。しかし、人間の心がこもることによって、それは赤い靴ではなくなるのです。こういう「人」と「もの」の関係があったことを知って、私も子どもに学びながら、本当に子どもにとって必要なもの、心のこもったもの、精神を豊かにするものをつくっていかうという気持ちになったのです。デザイナーは、色々なものを作りますが、それをどのように渡すかで、子どもの中で大事なものになったり、小さいものになったりすることがあるのだと気づくことができました。

その後の私は、とにかくもの作りに没頭しました。例えば、20個の作品を芸大時代の先輩の所に持っていくと、おもちゃとして売れそうな形とおもちゃという概念の中にはない作品とに分けられました。子どもの好きそうなもの、

おもしろそうなもの、それが商品として売れないとダメなのです。しかし、「もの作りは、違う」と自分の中で割りきって考えると、すっきりして、再びやる気が起こってきました。とにかく売れるものではないものは、お金がある時に作っていかうと考えました。一流のデザイナーやコピーライター、カメラマン等友達の輪を頼りとして、売れそうな作品を50セット作って売ったら、1000万円入ってきたこともありました。そこで、「作品を100点作ったら、個展をしよう」という新たな目標を掲げ、さらにももの作りに没頭していきました。この間、約1年間は、他のことは一切しない、一か月間くらいは、お尻が椅子にくっついたままの状態のときもありました。とにかく、色々な形をひっつけたり、はっつけたりして、手でアイデアを作るのです。つまり、手で考えていく、それを図面で表す、寝てまた図面を書いて、これが永遠に続きました。まさに、死ぬような日々を送りました。手がどんどんとアイデアを生み出し、集中力が作品を生み出しました。しかし、アイデアは、ついに出なくなりました。それが100点目の作品を作り終えたときの事です。そして、これらが、私のデビュー作品となったのです。この時は、西武百貨店で個展を開催しましたが、作品は飛ぶように売れました。

それからというもの、順風満帆でありましたが、40歳の時、ある友達の3歳の子どもさんがいるお宅に行ったとき、その方は、お金持ちであったので、家の中にたくさんおもちゃが置いてありましたが、それが幸せかと疑問に思いました。おもちゃって何だろう、この子は、本当に幸せなのだろうか。なぜ、子どもはおもちゃで遊ぶのだろうか。おもちゃってなくても良いのではないかと等と真剣に悩み出しました。そんな、ある日、ピカソの半世紀を綴ったテレビを見ました。非常に自由な発想であった、まれにみる天才の男＝ピカソだったら、おもちゃをどのように考えていたのだろうかと思いを巡らしました。そして、「おもちゃとは何かを考えたいから、スペインに行く」という決心をしたのです。

また、私はその頃、フレーベル、モンテッソーリー、シュタイナー等の教育学を知りたくて、先人達の本を読み耽りました。フレーベルの本は、とにかく、訳がとても難解でした。私は、直感的に作っていた自分の世界を哲学にした人が、150年前にいたことに悔しさと嬉しさを感じました。つまりフレーベルの本にそれが詰まっていたのです。繰り返し、繰り返し読んだものです。奇しくも、私がスペインに旅立った年、フレーベル全集が玉川出版から出ました。スペインに滞在中は、フレーベルの作ったもの（恩物）をこうしたら良いのではないかと改良してみました。そして、帰国後、「童具館」を開設し、アトリエを開きました。そこでは、おもちゃを学際的に広げようと、科学的な組織

を作りました。特に、アトリエで、子どもと関わってみると、フレーベルやモンテッソーリが言っている以上に感動することがたくさんありました。

ここで、子ども達の素晴らしい作品を画像で紹介します。

これは、4歳児の『にわとり』3歳児、『メロンパンとアマショク』

『みみずくの剥製』これは作者の子が初めて絵の具とモチーフで書いた作品です。それまでは、アトリエに来ては、つきそいのお母さんに「いやだ」と言って、描こうともしない状態が1年間も続きましたが、ある日、気持ちが湧いたのか、筆を握りました。この時は、書いている本人もびっくりしている様子で、とにかく、ぐちゃぐちゃになる色の変化を楽しんでいました。実は、子ども自身、無我夢中になっている時に一番色々なことを学びとっている、感じ取っているのです。これは、『僕の顔』（天才になって書いたもの）近代絵画の巨匠の絵といっても疑わないでしょう。これが、良いと思う人は、どれくらいいますか？『顔、三原色（3歳児の作品）』です。これが絵になっている、絵としてまとまっているのです。私は、色のバランスをとっている、4歳児の姿を見ていて、素直に負けたと思うくらいの絵のレベルです。まさに、フレーベルの文献に出会った時と同じ嬉しいと悔しいのが混ざり合った気持ちです。

ここに3枚の絵を並べます。皆さんは、どれが好きですか？好きなものが、それぞれに良いのです。「どう書きなさい、こう書きなさい」と絶対に言わないで下さい。幼稚園や保育園行くと、いつも先生はしゃべっているという印象を持つのは私だけでしょうか。子ども達はその分だけ傷ついているのです。「これは、何歳の絵に見えますか？」ネッサリーという抽象画の巨匠の絵です。皆さん、2歳児くらいの絵だと思いませんか。この絵のすごさは、色を対比させているところです。モチーフとモチーフを結ぶ赤を暖色として持ってきている。これが、子どもの持つ素晴らしいさなのです。どうぞ、皆さん、子どもが表現するときに、ああ、こうだということを言わないで下さいね。何故ならば、大人の絵と子どもの絵を区別できなかったのですから、そして、子どもの力を信じて待つてあげることが必要です。子ども達が一つの作品を完成させるのには、（年長児くらいになると）1時間から1時間半時間をかけてあげて欲しいものです。時間がたっぷりあると、書きたいように、書くことができます。

解剖生理学者の養老猛司さんは、「人間の中に美や調和がはぐくむDNAが組み込まれている」と言われています。古代、原始人は、魂を調和させる活動、神を調和させる活動を行ってきました。人間は、絵や歌、もの等を作っている時、集中しているときに精神が透明になっていく、それが人間の本質であり、「ものをうみだすことは、人間の生

命であり、喜びである」とフレーベルやモンテッソーリ、ペスタロッチ等の先人達も語っています。

皆さんは、無我夢中になり何かに打ち込むことがありますか？お母さんの視線をいつも感じないことはなかった。そのような不幸な過去を引きづっていませんか？子どもは母親や先生に褒められた時に、「いい子、〇〇ちゃん」で良いのです。

次の作品は、『広島球場』を積み木で作りました。（5歳児の作品です）『関門海峡大橋』同じく5歳児の作品ですが、私は、この保育現場に15年間、指導に通っています。実は、指導しないが、指導に行っているのです。皆さんは、これは、本当に子どもだけでできていると思っていますか？実は、先生が手伝ってあげているのではと疑っていませんか？すっかり任せきると、子ども達は、素晴らしい作品を作ることができるのです。先生方の役割は、相談にのるだけで良いのです。例えば、関門海峡大橋ならば、「つり橋は、できないけれどどうしよう」「紐を探したらできるのではないか」このようなやり取りで十分です。つまり、ヒントを与えることです。次の作品は、「おひなさま」ですが、皆さんは、こういう力を子ども達が持っているということはどうぞ知って下さい。

保育現場の先生方の絵の指導に出かけたことがあります。が、「1時間～1時間半すると納得のいく作品ができた」「先生の言われていたこと、本当でした」という声が多く聞かれます。「子どものなすがままに、準備したら、どうぞ」で良いのです。大人が一切、声をかけないと子ども達は集中します。だいたい、10分くらいするとシーンとするものですが、実は、この静けさに耐えられないのが現場の先生方なのです。「何にもしゃべらないで、子どもと関わるほど、苦痛なことはない」と言われます。実は、作品は手数が多いいほど良い作品になると言われています。子ども達が夢中になっている時、室内には、紙をこするようなわずかな音だけで十分です。

また、私のアトリエでは、速乾性のある、リキテックスという絵具を使っています。高い絵の具ですが、有効であると思いますので、機会があれば使ってみてください。

前の黒板を見てください。このような図式を書いてみました。人間は、「おぎゃー」と生まれて直ぐは、横になって寝ている無力な赤ちゃんに過ぎません。しかし、母親が我が子をいとおしく思い、目と目を合わせて見つめることを毎日繰り返す中で、確実に育っていくものがあります。「臨界期」といって、人間が成長・発達を遂げる過程の中で、その時期にこそ育てないといけない重要なものがあります。大脳の中でも最近特に注目されているが、新しい脳と呼ばれている大脳新皮質です。その中でも大脳前頭気質は、3歳頃までにきちんと育つと「自分が愛されている」とい

う「自己肯定感」が育まれます。これが大事です。赤ちゃんや小さな子どもにとっての生活環境が大切なのは、脳の発達にも関連しているのです。

生まれたばかりの赤ちゃんに、まず与えたいのは、ボールです。与えるボールの大きさは、小さな手でも握ったり、持ったりできるものが良いでしょう。これは、「ベビーボール」ですが、ボールに紐をつけると、お母さんと引っ張りっこを楽しめます。また、「言葉の情報」を投げかけてあげることも大切です。親子が会話できる、コミュニケーションできるもので遊んで欲しいという思いで作りました。次に紹介するのは、「ケルンボール」です。円盤を回転させると、虹色の輪になります。紐のついた球体を円盤から取り外して、振ったり、引っ張りっこをしたりして、赤ちゃんに歌いかけ、語りかけて遊びます。(ここで、「ひらいた、ひらいた」(わらべうた)の実演)2個のケルンボールを振り子のようにふると、二つ球があたって、2拍子のリズムになります。すると、自然に身体が動き、リズム感が身につきます。子どもは、1歳頃になると立って歩いて、動きますが、まだ、知的な発達はあまり見られない時期です。その後、「一語文」「二語文」と言葉を獲得していき、1歳～2歳半頃になると、三つ四つの木片で繰り返し、繰り返し遊ぶ時期がきます。この頃になると、「みて遊び」が盛んになります。まだ積み木を上手く積み上げることができない子どもでも、レンガ型の積み木を電話に見立て「もし、もし」とお話をしたり、その電話がコップに変身して「かんぱーい。ごくごく、おいちいねえ。」と想像力をかき立てます。この時期は、子ども自身がああだ、こうだと試行錯誤している時期なので、凄い成長を遂げます。また、言葉もどんどん増えてきます。

皆さんは、天才ピアニストの辻井伸行君を知っていますか？彼は、まだよちよち歩きだった頃お母さんが毎日のように口ずさんでいる、「ジングルベルの曲」を突然、おもちゃのピアノで弾き出したのです。その時、お母さんはびっくりしましたが、「一つ、たった一つでも良いから、この子の人生に自信の持てるものを作ってあげたい。」と思ったそうです。生まれる時からの環境で子どもは育つのです。分かるから、分かるようになってから与えるのでは遅いのです。その前にその環境を与えておくことが大切です。「3つ子の魂百まで」という諺がありますが、その時の影響は、死ぬまでつきまとうという教えです。皆さんには、2歳の頃の思い出はありますか？日常のことは、全て覚えていないのに、不思議なことにその出来事が一生影響を及ぼすという体験が必要です。1歳の頃に、四角の積み木を持たせるという体験は、「一つのものの中に色々な可能性を持たせるようになる」ということに繋がっていきます。「あれがないとできない」「これがないとできない」のでは

なく、たった一つのもので、可能性を無限に広げて遊ぶことができるのです。子どもが夢中になっている活動には、色々という意味があります。一つの情報を色々なものに関連づけて、遊びを広げる「応用する力」を育てます。

色々な情報を関係づけて、新しい情報をみつけて、新しい世界を作り出していく。一つの情報を多様化する、色々な情報を関係づけて、統一していく、これを子ども達は、頭の中でいつも行っています。まさに、これこそが「創造活動」なのです。ですから、子ども達に与えるおもちゃは、イメージできるもの、単純なものが良いです。ひとつの積み木でお話ができるようになることも良いし、立方体や直方体を組み合わせながら、応用力や関係づけて統一する力、色々な色と形で、絵を描くように、多様な情報を統一して生まれる積み木の世界もあります。

また、物事には、「秩序性」があります。人間はいつも秩序を見つけだそうとするため、3歳頃になると、「なんで」「どうして」と質問を繰り返していきます。3歳児くらいになると物事には、答えがあることを知ってくるのです。2歳児の直感力が言語で理解しようとする客観性に変わります。それが上手くいくと、4歳頃、お友達と遊ぼうとする仲間意識も芽生え、好奇心は、ますます盛んになります。他者を求める感動を成し遂げると、5歳児の協同活動が盛り上がります。まさに、小学校に上がる前の姿です。

最後に私の娘の話をしてします。私がスペインに滞在していた当時、娘は原因不明の血を出しました。一晩に渡って大量の血を流し、私は、ただおろおろするばかりでしたが、その時に、窮地な中にも「お父さん、私は大丈夫だよ。大丈夫だからね。」と言う娘の健気さに心を打たれ、「この子のためなら、自分の命も惜しくはない」と思わされたことがありました。「この子は血を流しながらも、父親に何が大切かということに分らせてくれたのだ」と、それまで自分勝手に振る舞っていた自分の行動を省みました。

子ども達は、時には、我々大人が忘れかけている世界を思い出させてくれる存在でもあります。私にとって、積み木をはじめ、童具の最終のクリエイター(創作者)は、子ども達です。私は、最近、アトリエに来る子ども達の姿を見ながら、「積み木」とは、子どもの力を積む力が「積み木」となるんだなということを知りました。

(著書の紹介)

『遊びの創造共育法(全7巻)』

『子どもの目が輝くとき』

『童具デザイナーのスペイン』

『おもちゃの文化史』 以上玉川大学出版部

『平凡社大百科辞典』

『ブリタニカ国際大百科辞典』で玩具の項執筆

『小学校国語1年』(学校図書)他教科書執筆掲載